

Anima Italica

Anima Italica IX

アニマ・イタリカ 第9回

Exclusive Notes

SEMIRAMIS

Paolo Faenza

パオロ・ファエンツァ

当時、SEMIRAMISは
誰からも「神童」と
みなされていたよ!

Project / Translation / Text ● Amy Ida
Intro Text ● Franco Vassia

イタリアン・プログレッシヴ・ロック史に於いて、きわめて特殊で創造的な音楽を構築したと称される孤高のグループ SEMIRAMIS。彼らを表わすには「Dedicato A Frazz (フラッツに捧ぐ)」('73)で十分だろう。アンサンブルの頭文字を組み合わせて生まれた架空の人物 Frazz (フラッツ)の怪奇な心象世界を現したコンセプト・アルバムで、心のドラマー・社会との関わりの難しさ—世界の多大な悲劇を音楽で明らかにするバンドは、後にも先にもこの1枚でコアなファンの熱狂的な支持を得て行く傍らで、痛みを伴う変化やメンバーの度重なる早世などの様々な困難に見舞われ、紆余曲折な運命を辿り、いつしか、伝説の彼方に消えたと思われていた。そんな SEMIRAMIS が結成から50数年経った今日、夭折したマウリツィオ・ザリッロとジャンピエロ・アルテジャーニに敬意を表し、ついにスタジオ・レコーディングによる2nd「La Fine Non Esiste」を完成させた。デビュー作からの「コンセプト・アルバム」の流れを一新し、現実と空想に住むキャラクターを追求した新作を中心に、「幻のプログレ・バンド」の異名を取る SEMIRAMIS の知られざる軌跡を、創始者の1人であるパオロ・ファエンツァに存分に語ってもらうため、今回に限って(本人の希望もあり)従来のインタビュー形式ではなく、手記形式とさせていただいた。SEMIRAMIS の後継者、パオロの独占手記をご一読あれ!

Photo: Eva Maslowsky

■ SEMIRAMIS の起源

チャオ! SEMIRAMIS のドラマー、パオロ・ファエンツァです。11歳の時に PROCOL HARUM の「A Salty Dog」('69)を聴いて、「自分はドラムを叩かなければならない」と悟った瞬間から始まった僕の個人的で音楽的な話から始めてみたいと思う。自分にとっての初めてのロック・バンドでカヴァーを演奏していたのは12歳の時。ドラムの前に座って、音楽の道を歩み続けて、わずか2年後にジャンピエロ・アルテジャーニとミケーレ・ザリッロに出会った。当時ミケーレは2つ下でまだ12歳で…3人とも極端に若かったにも関わらず、カヴァーではない自分達の未発表曲を演奏しながら音楽活

動と一緒に始めたんだ。でも、その1年後に僕らの道は分かれてしまった。ローマ郊外の同じ地域に住んでいたのに僕らが再会することになったのはだいぶ後で、1972年にミケーレ・ザリッロとマウリツィオ・ザリッロ、そしてマルチェッロ・レッダヴィデの3人が、ジャンピエロと私に彼らが結成して間もないグループに入らないかと誘ってきたのさ。それが… SEMIRAMIS だった!!

■ 「Dedicato A Frazz」誕生の舞台裏

1972年にマルチェッロ・レッダヴィデが文学的アイディアをぎっしり書き詰めたノートを抱えてリハーサル・ルームにやって来た。そこから、すべてが

始まった。マルチェッロは彼のずっと想像していた「先見の明のあるサイコパス(精神病質者)」の物語を書いていた。まさに、僕らの愛してやまない Frazz (フラッツ)の誕生さ! マルチェッロがノートに書き綴っていた文章は1973年にリリースすることになるアルバム収録曲「La Bottega Del Rigattiere」、「Luna Park」、「Zoo Di Vetro」、「Per Una Strada Affollata」、「Dietro Una Porta Di Carra」、「Frazz」、「Clown」のテキストの文学的母体になった。1972年9月から翌年の9月17日までの1年間、ミラノのレッグ・ゾンで制作したんだけど、レコーディング開始から終了する日まで、僕らは昼も夜もレコーディング・ルーム(僕らの



Plancia Concerti 1972

間では「精神科病室」と優しく呼んでいた!)に閉じ籠り、「精神病患者の音楽」に命を吹き込んでいった。創造の原動力となったのはミケーレ・ザリッロだ。わずか15歳ながらも、当時すでに才能あるギタリストであったミケーレが「音楽的アイディアの火山」であることは誰の目にも明らかだった。僕を含めたメンバー全員の演奏の習熟度の高まりと共に、長い時間をかけて、自分達の音楽に形と生命をゆつくりと与えてきた。

プログ・ロック・ムーヴメントが最高潮を迎えた1973年という時代性に付き、イタリアン・プログレッシヴ・ロックの基盤となるイタリアのプログ・ロックは、'50年代から当時は、いわばロック「ポップ」と形容されていた時代だった。僕は、ひとつのバンドとしてコンポーザー兼アレンジャーとして機能していることに加えて自分達の音楽に対して計り知れない熱意に駆られていることなど、すべてに全員が熱狂しているような「勢い」があった。夢中なあまり、セルフ・プロデュースまでしてしまっていた僕らを見ていたファビオ・デミリオ(親しい友人で写真家)が、1人のアメリカ人に僕らを引き合わせた。それがロバート・カニンガムだった。ロバートは当時、『Sound Flash』と『SuperSound』という音楽雑誌の発行人だった人物だ。ロバートに続いて、イタリアの『The Daily American』誌の編集長が僕らの「精神病患者」(Frazz)にまつわる物語を聞いて非常に感銘を受けて、アルバム制作の投資を買って出た。これらの出会いから Trident



Super Sound 1973



Frazz 1973 Palasport Roma

Recordsとの契約が生まれたと言っても過言ではない。僕はアルバムのレコーディングと、ローマ中心部にあるマネージメント・オフィスも兼ねた専用のリハーサル・ルームでさらに多くの音楽を書くことになった。当時としてそれは大業だったよ。その頃、1973年5月からイタリアで重要だったフェスティヴァルに多数出演した。そこで、有名だったPFM、BANCO、AREA、OSANNAなど、いずれも自分達より5〜6歳年上の偉大なミュージシャン達と同じ舞台上で演奏した。当時、SEMIRAMISは誰からも「神童」とみなされていたよ!

■「Dedicato A Frazz」

同年11月、ついに僕らの「Dedicato A Frazz」をリリースする日がやって来た。一度見たら忘れない強烈なインパクトのアルバム・ジャケットは、CYAN THREEというグループを率いる英国人ドラマーで、有名な画家でもあるゴードン・ファゲッターに描いてもらった。このデザインによってヴィジュアルでもFrazzの全体像が現われ始めた。アルバムのプレゼン公演も特殊にしたかった僕らが選んだ舞台は、同じくローマ出身のカンタウトレである(当時まだ若かった)アントネッロ・ヴェンディッティのコンサートだった。彼のオープニング・アクトを飾る大役が回って来たので、その同じステージ上で自分達のアルバム・リリースを「演奏発表」することにしたんだ。規模も話題性も申し分ないステージだ。SEMIRAMIS = Frazzになった瞬間だった。



Dedicato A Frazz (73)

■SEMIRAMISの終焉

アルバムもライブも世間の注目を集め、大成功の階段を駆け上がろうとしていた1974年の秋、ロバート・カニンガムとTridentの両方から大型のオファーが舞い込んだ。それがどんなに素晴らしい機会であるかを当時の僕は理解できず、残念なことにSEMIRAMISを終了することを決めてしまった。あの頃の僕達はあまりにも若くて、純朴すぎたからなのか。突然解散してしまうなんて。今でも、「なぜ? ...どうして?」と自問するよ。

解散後、各メンバーはそれぞれ違う活動をした。ミケーレはソロの道を歩み、ポピュラー音楽の分野でシンガー・ソングライターとして大成した。同じ道を歩んだジャンビエ

ーロも2枚の美しいアルバムを録音して、'80年代半ばに作家に転身した後、イタリアの偉大な演奏家のために多くのヒット曲を立て続けに書いた。その中で最大のヒット曲「Perdere L'Amore」は、1988年の『サンレモ音楽祭』でマッシモ・ラニエリを優勝に導いた1曲だ!

SEMIRAMISを一緒

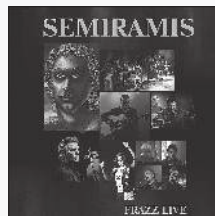
に結成した他のマウリツィオ・ザリッロとマルチェロ・レッダヴィデの2人は音楽を離れた。僕は、1983年にドラマー兼ロード・マネージャーとしてジャンビエーロと仕事を始めて、1992年までローマ出身の様々なカヴァー・バンドを転々として、地元ローマの様々な会場やクラブで演奏活動を続けていた。思えば、ミュージシャン一筋だったよ。

■SEMIRAMIS 2.0

2013年、親愛なる友人で、イタリアのプログレッシヴ・ロック専門誌『PROG ITALIA』の編集長であるガイド・ベッラキョーマと話をしていた。自他共に大のプログレ・ファンと認めるガイドと意見交換しながら、僕はプログレッシヴ・ロックが力強く復活しつつあることにハッとした。いても立っても居られなくなって、ジャンビエーロに翌日電話して叫んだ。「SEMIRAMISを復活させなくちゃならない!!!!」すると、ジャンビエーロは一言「あり得る」と答えた。僕は他のメンバーにも電話をかけた。しかし電話に出たのはマウリツィオだけだった。マウリツィオは自身のレトロ・オルガンのEminentを修理して、一度退いた音楽の道へ戻するために猛練習を始めた。その時点で、マウリツィオをサポートしてくれるベーシスト、ギタリスト、シンガー、キーボード奏者がいずれもないことに気づいて、どうしようということになって、僕はSEMIRAMISプロジェクトに情熱を持って参加してくれる4人のミュージシャンを探し始めた。そうして、同年、すべてが再始動した。その時の編成は、マウリツィオ・ザリッロ(Eminent organ, synth)、ジャンビエーロ・アルテジャーニ(ac-g)、バオロ・ファエンツァ(dr, vibraphone)、イーヴォ・ミレト(b)、ダニエレ・ソレンティー(kbd, Hammond, synth, transverse flute)、アントニオ・トラバニ(el-g)、ヴィート・アルディート(vocal, ac-g)の7名で、同メンバーで2014年にガイド主催の『Progressivamente Free Festival』でSEMIRAMISのコンサート活動を再開した。そして3年後の2017年4月、ジェノヴァのラ・クラーク劇場で最高潮に達した。この時の音源と映像をBlack Widow Records(在ジェノヴァ)がレコーディングしていたこ

とがきっかけで、ライヴ・アルバム「Frazz Live」('17)をリリースすることになった。

ジェノヴァ公演後、個人的な理由でバンドを離れてい



Frazz Live ('17)

ったダニエレ・ソレンティーの後任としてマウリツィオのサポート役にリーノ・アマートが加入した。めまぐるしい変化の中で、ジェノヴァ公演を収録した素材のミキシングとマスタリングの最中、SFERA entertainmentからSEMIRAMISのライヴ・オファーをもらった。『THE BEST OF ITALIAN ROCK Vol.5: Summer Festival 2017』(クラブチッタ招聘制作)で、ミュージシャン仲間としても付き合いのあるDELIRIUMとのステージだった(8月12日)。僕らにとっては初来日で、「Dedicato A Frazz」を演奏できる絶好のチャンスだ。Frazzが海を越えて、日本の聴衆の前で甦ることに僕らは興奮した。

Anima Italica



SEMIRAMIS
Live in Kawasaki, Japan
12th August, 2017
Photo: Yuzi Okumura



Paolo Faenza
Live in Kawasaki, Japan
12th August, 2017
Photo: Yuzi Okumura

歓喜も束の間、日本行きが1ヶ月前に迫った7月7日に、マウリッツィオ・ザリッロが病気で逝去した。あまりに突然の出来事で、僕は皆、絶望の淵に沈み、何もかも放棄することを考えた。どうしたらいいのか、どうできるのか、悲しくて、激しい感情の対立の後、僕はバンドを一度抜けていったダニエレ・ソレンティーニに来るように頼もうと決心した。マウリッツィオの死に衝撃を受け、マウリッツィオと特別な絆で繋がっていたダニエレは、何よりも友人のマウリッツィオに敬意を表するためにSEMIRAMISに戻ることに同意してくれた。九死に一生を得て、僕らの時計は再び動き出した。

日本での公演を終えて、SEMIRAMISとして音楽活動を続ける一方で、僕にとって人生で最も悲痛な出来事が起こった。2019年の冬に親友ジャンピエロ・アルデジャーニが帰らぬ人となった。それから、ジャンピエロの死に続いて、たくさんの不愉快な災難に遭遇した。この時点で、深い絶望の、まさに悲しみのどん底に突き落とされた僕は、あまりの心の痛みに打ちひしがれて、これ以上続

ける力がないと感じ、SEMIRAMISの物語を終わりにしよう、と決意した。他のメンバーたちは、この決定にかなり動揺し、非常にイライラすると同時に、愕然としていた。あまりにも大きな悲しみによってのみバンドの終焉を決めたことをマウリッツィオとジャンピエロが知ったらどう思うのか？メンバーの様子に、そう考えさせられることもあった。

■2度目の解散、そして再生

一度止まりかけたバンドの鼓動が再び動き出したのは、SEMIRAMISとして『VerticalMovie Festival』の短編音楽賞部門で参加していたエヴァ・マスロースキー監督作品『Perchè La Fine...Non Esiste』という映画が第2位に輝いた瞬間だった。パンデミックに翻弄された悪い時代が終わったら、何か良いことが起こらなければならないのが世間の常だ。僕はふと、SEMIRAMISにはまだ表現したいことがある、全部出し切っていない、伝えたいことをすべて音楽にする必要があると感じた。そして、何か新しいことをしなければならぬ欲求に突き動かされた。

僕の次に、グループの中心的メンバーであるダニエレ・ソレンティーニが新しい曲を書くことを僕に提案してきて、僕はダニエレのスタジオで数ヶ月間ミーティングを開始し、それぞれが温めていた様々なアイデアを実践することにした。

思っていたことすべてを実現させるために、いくつかの新しいメンバー改革が必要だった。僕がまず着手したのはアントニオ・トラパーニの後任としてエマヌエーレ・バルコを2019年に就任させたこと、続いて、2022年12月にバンドを抜けたヴァイト・アルディートの代わりにマルコ・バルマ（ダニエレも参加しているLAVIANTICAのリード・ギタリストでもある）をアコースティック・ギター担当に、ヴォーカルのエマヌエーレ（ダニエレの兄弟の友人）の双子であるジョバンニ・バルコを新しいヴォ

ーカルに抜擢した。新ラインナップの相互関係と素晴らしい音楽的才能から、完全にプログレッシブな6つの新曲、“Tenda Rossa”、“Donna Dalle Ali D'Acciaio”、“Cacciatore Di Ansie”、“Sua Maestà Il Cuore”、“In Quel Secondo Regno”、“Non Chiedere A Un Dio”が誕生した。

バンド全員でアルバムのタイトルを決めようと会議をしていて、なかなか決まらないで疲れ果てて、全員して「ばかばかしい！」ってことになって。その時、顔を見合わせて叫んだ。「でも、僕らにはタイトルがあるじゃないか…」

La Fine Non Esiste! (終わりなど存在しない)

これは、アルデジャーニが2017年のライブ（正確には彼にとっての最後のライブ）で朗読した文章の中の言葉で、アルデジャーニが書き残したフレーズに由来して生まれたタイトルだ。新しく生まれ変わるべく、SEMIRAMISのメンバーも一新して、僕は制作に臨んだ。

■ニュー・アルバム

レコーディングはダニエレのスタジオで行なった。そして、何よりも古き良き時代のアナログ感を引き出す最先端の技術を駆使するべく、オーディオすべてをサルデーニャのマウリッツィオ・ピンナへ送った。彼の熟練した「耳」と「手」に委ねられたサウンドはアメリカン・カラーに彩られた。アルバムはAMS Recordsからのリリースだ。今作はコンセプト・アルバムではない。歌詞が単一の物語で繋がっているのではなく、楽曲それぞれは異なる物語をテーマに扱っている。そこが「Dedicato A Frazz」とは異なる点だ。音楽的には、リズミカルな変化とアレンジメントを背景に、ハード・ロックとプログレッシブが常にせめぎ合う典型的なSEMIRAMISメロディ満載だよ。今回のアルバムは自分達に敬意を表して作った一方で、SEMIRAMISの刻印がどこを聴いても押されて出てくるような1枚を目指した！そのすべてを象徴するアルバム・デザインにしたいと、表紙は画家のマッシミリアーノ・アンジェロッティに依頼した。アルバム・カヴァーはバンドの作品にとっての、いわば「名刺」だからね。

SEMIRAMISを代表して、ファンの皆さんに感謝したい。覚えていてほしい… La Fine Non Esiste! (終わりなど存在しない)ということを！

(2024.1.10)



Maurizio Zarrillo (R.I.P.)

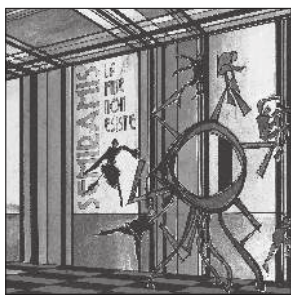
Giampiero Artegiani (R.I.P.)
Photo: Yuzi Okumura

SEMIRAMIS

New Album

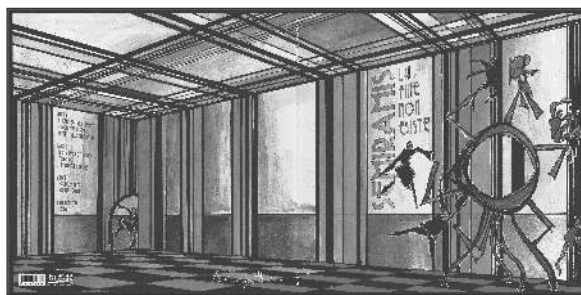
「La Fine Non Esiste (終わりは存在しない)」

アルバム解説 ● SEMIRAMIS



SEMIRAMIS La Fine Non Esiste ('24)

BTF / AMS
VMCD 260 (CD) / VMPL 260 (LP)
ディスクユニオン DUG294 (CD)
3/13 発売



パオロ・ファエンツァ (drums, vibrapone)
イーヴォ・ミレート (bass)
エマヌエレ・バルコ (electric guitars)
マルコ・バルマ (acoustic guitars)
ジョバンニ・バルコ (vocals)
ダニエレ・ソレンティー (keyboards, organs, synth, transverse flute)

1st アルバム「Dedicato A Frazz」のリリースから 50 数年の時を経て、グループの創設者として唯一現存するパオロ・ファエンツァの決意のもとに、SEMIRAMIS 待望の 2nd アルバムがついにリリースされた！生涯の友人となったマウリツィオ・ザリッロとジャンピエロ・アルテジャーニとの 2014 年の宿命の再会、仲間と共に歩んだ軌跡、共有したすべてを継続する意図で制作に臨んだ今作では、ローマのプログレッシヴ・ロックをゆりかごに育った生粋のミュージシャン群でラインナップを一新、デビュー・アルバムからの連続性は保ちつつもモダンなサウンドが印象的で、キーボード、モーグ、フルート、アコースティック・ギター、エレクトリック・ギター、ヴィブラフォンなど、バンドのバックグラウンドを特徴付けるすべての楽器をフィーチャー。生き生きとした彩り豊かなアレンジによって幅広い楽曲に命が吹きこまれた。これぞ SEMIRAMIS、正真正銘の「プログレ」だ。

「La Fine Non Esiste」は、可能、日常、正常と考えられているものの限界の、さらにその向こう側へ超えていく能力への賛歌である。小さくても大きくても、人が一歩を踏み出すことを可能にする力、その美しい輝きと狂気の輝き。変化の著しい社会の根本と向き合い、意識を集中させ、境界線を乗り越えるためには、犠牲、放棄 … そして自身の内側を真に見つめ、1 人 1 人の中に住む千の宇宙を照らす者のみによって与えられる真価を啓明する努力が伴うのだ。

1. In Quel Secondo Regno

幕開けは、代名詞となってしまった「Dedicato A Frazz」の呪縛を打破するために、明確なサウンドの変化を音楽性に追求した 1 曲。かの有名なダンテの『神曲』がハード・ロックと融合し、ジャンピエロ・アルテジャーニの声に託された

“Purgatorio (煉獄)” (ダンテの『神曲』3 歌曲のうちの 2 番目。他に“地獄”と“楽園”がある) のメロディックな雰囲気一気に引き込まれる歌声は、SEMIRAMIS の音色そのものである。

2. Cacciatore Di Ansie

この曲でアルバムは再び非常に複雑な曲から始まる。エミネント・オルガン、シンセ、ヴィブラフォンを自在に操る典型的な SEMIRAMIS サウンドを保持しつつも、フュージョンからロック、メロディックからクラシックと、目まぐるしく移行する曲調によって、モダンでインターナショナルなサウンドに仕上がった。歌詞の内容は、人間誰もが多かれ少なかれ強く経験し、常に解決しようとしている現在の問題である「不安」について語っている曲で、歌の

主人公は自分自身の不安を打ち破るために、その「不安」のハンターに自ら成ろうとする。

3. Donna Dalle Ali D'Acciao

鋼鉄の翼を持つ女。他の曲とは異なり、この曲は '30 年代のアメリカの偉大な航海者、アメリカ・イアハートに敬意を表した歌詞から始まる。アメリカ・イアハートは海を渡ろうとして、自身のロッキード機ごと悲劇的にも海に墜落してしまった。彼女の帰還を願って「あなたの親愛なる友達」からの、心のこもった手紙を書いたアメリカの様々な友人たちの気持ちを表現した雰囲気音楽性に追求した。

4. Non Chiedere A Un Dio

音楽的には、もう一度生きたいという Frazz の願望を人々に伝える必要性から生まれた曲。ベースとフルートのメロディとミックスされたアコースティック・ギターの間奏で聴き取れるように、ここでは過去のアルバムの雰囲気とメロディに戻ることにバンドは何の躊躇もなく演奏している。歌詞の中で、新しい Frazz の内面の葛藤を理解してもらいたいと願う僕はリスナーへ問い掛ける。「癒すためには死ななければならないのだろうか?」すると、「良心」は Frazz に「音楽だけが自分を救えるだろう」と告げるのだ。

5. Tenda Rossa

この曲では、イタリア人飛行士ウンベルト・ノビレの物語が語られる。「不可能を求める」ことを望んだウンベルトは、イタリア「あの遠い『28』年に」号と名付けられた印象的な飛行船に乗って北極点に墜落し、乗組員のうち数名だけが生き残るのだが、ウンベルトを救ったのは有名な Red Tent (赤いテント) だった。苦悩から悲劇、あきらめから安堵まで、歌詞に登場する人物の感情起伏を音楽的に表現する必要性から、純粋な Prog が選ばれた。

6. Sua Maestà Il Cuore

この作品は、「Il Cuore (心)」という自分自身の絶対陛下である自分の心の千の側面を分かちたいために、苦労に苦労を重ねた末にその「陛下 (心)」の御前にやっと辿り着いた作曲者本人の心の内部探求から生まれた曲だ。その対面では、答えのない過酷な真実が彼を待ち受けている。音楽的には、ピアノと声によるロマンティックでハートフルな間奏が主役である。



back: Marco Palma, Giovanni Barco, Ivo Mileto, Paolo Faenza
front: Emanuele Barco, Daniele Sorrenti
Photo: Eva Maslowsky